

# *Вестник* № 65

〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1

早稲田大学文学部露文コース室

tel: 03-5286-3740

e-mail: robun@list.waseda.jp

<https://dpt-bun-russia.w.waseda.jp/>

● 会員の近況より

2025 年度 早稲田大学ロシア文学会 秋季公開講演会

高柳聡子氏「国を出て国を想う——現代ロシアの亡命女性作家たち」傍聴記

小嶋 冴

年末年始ロシア旅行記

岡田陽奈

● 会員の最新情報

● 早大ロシア文学会維持会員制度についてのごお願い

● 学会だより

● 2026 年度春季公開講演会・総会のお知らせ

## 会員の近況より

今号では、2025 年度まで大学院修士課程に在籍されていた小嶋冴さんが 2026 年 1 月 17 日に開催された秋期公開講演会の傍聴記を、また同年まで文学部露文コースに在籍されていた岡田陽奈さんが 2025 年末から 26 年初頭にかけてロシアを訪れた際の旅行記を寄稿して下さいました。

### 2025 年度 早稲田大学ロシア文学会 秋季公開講演会

高柳聡子氏「国を出て国を想う——現代ロシアの亡命女性作家たち」傍聴記

小嶋 冴

去る 2026 年 1 月 17 日の土曜日、早稲田大学ロシア文学会秋季公開講演会にて、高柳聡子氏による講演「国を出て国を想う：現代ロシアの亡命女性作家たち」が行われた。氏は、ロシア文学とジェンダー・フェミニズムを専門とされ、博士論文のテーマでもあるタチアーナ・トルスタヤをはじめとするロシアの女性作家の研究分野でご活躍されている。

今回のテーマは、現代ロシアの亡命女性作家たちの紹介である。ロシアの作家たちの亡命

の動きは、1917年のロシア革命以降、何度かあり（氏は5つの時期に分けている）、そのうち、今回は1990年代以降の新しい亡命がメインである。とくに紹介した作家は、エレナ・コスチュチェンコ、グゼリ・ヤーヒナ、マリア・ステパーノワ、マリナ・パレイの4名である。

筆者は、近年の著名な作家といえば、現ロシアのプーチン体制に抗議し、作品または外部の活動で声を上げたことにより、政府から睨まれ亡命するか、自ら失望して出国するかのどちらか、少なくともその傾向が強いと思っていた。逆に、国内に残り、収監もされず、迫害も受けない芸術家たちはやはり体制に迎合するところが無きにしも非ず、なのではないか、とも思っていた。つい、知識人たちにアンガージュ的な役割を期待してしまうのである。

しかし、今回の講演を通じて、筆者のような考えは、亡命／非亡命の二項対立、分断を進めるばかりであると痛感した。氏は強調する。私たちは、亡命者たちと、亡命できなかった人たちとの対話を促進すべきなのである、と。

それに、亡命を選んだ人々として、望んでそうしたかったわけではない。冒頭に上げたエレナ・コスチュチェンコは、『ノーヴァヤ・ガゼータ』のジャーナリストだった。彼女は、2022年にウクライナから戦争報道をしたかどで、ロシアの当局から目をつけられた。

コスチュチェンコは、『ノーヴァヤ・ガゼータ』の編集者から出国を強く勧められる。レズビアンである彼女は、もし帰国すれば、殺されるだろう。そしてその死は、性的マイノリティを狙ったヘイト殺人として処理されることになるだろう、と。彼女のこのときの苦悩を綴ったエッセイは、『私の愛するロシア』という題で、氏が日本語に翻訳している。一部抜粋しよう。「……私は頭がしっかりしたら、執筆中の本を書き上げてロシアの自宅に戻るつもりだった。私の仕事のすべてが、私の人生のすべてが、私の母と父がいるあの国へ。故郷からのニュースが恐ろしいものになればなるほど、私の居場所はまぎれもなくあそこなのだと感じる気持ちが強くなった」。

ここで氏が注目したのは「私」という一人称を表すことばである。残り3人の女性作家たちにも、ひいては他のロシアの女性作家たちにも多い傾向であるが、彼らは「私」を強調することによって、国家による押しつけの歴史ではない、「私」だけの、誰にも奪われない物語を編みだそうとしているのである。氏は、この個人の物語を「感情の歴史」と呼び、国家の歴史に対置するものであると捉えている。

人目に紹介されたグゼリ・ヤーヒナは、2022年のロシアのウクライナ侵攻を「これは私の戦争ではない」と、強くロシア当局を非難した。このことばにも「私」と国家を分けて語ろうとする姿勢が見られる。カザン出身のタタール人の作家であるヤーヒナは、長編小説『ズレイハは目を開ける』で、リュドミラ・ウリツカヤら著名な作家たちに絶賛され、ロシア文壇界で一躍、時の人となった。ヤーヒナの物語は、タタールという民族性と、家族というテーマを基調に展開される。つまり、ここでも「私」、すなわち個人の歴史が描かれる。

個人の歴史、つまり記憶について語ろうとする作家は、ヤーヒナだけではない。3人目に紹介されたマリア・ステパーノワは、2022年に戦争反対の公開書簡に署名後、出国した。彼女は、小説『記憶の記憶』をはじめとするいくつかの作品で、ロシア国内外で高い注目を

集めている。

ステパーノフは「記憶は戦争の領域になっている」と主張している。戦争の原因となるのは、大抵が過去に起きた出来事をめぐりものだからだ。記憶をめぐり戦争は当事者双方に、また社会全体に深いトラウマを残す。それを癒せる可能性があるのは、文字の世界、すなわち文学ではないか、と氏は言う。ステパーノフは、詩を戦争における一種のレジスタンスの形式だと捉えている。

4人目に紹介されたマリーナ・パレイはユダヤ人の家系であり、医師の資格を持っている。彼女は、チェチェン派遣を逃れるために1995年にオランダへ出国して以降、ロシアの土を踏んでいない。パレイは出国後も人気を誇っていたが、2014年のプーチンによるクリミア併合に反対を表明し、それ以降、ロシア国内で自身の著作を売るのを拒んでいる。

出国して30年ほどにもなろうとしているパレイは、しかし、亡命生活は、けっして自由な選択によるものではないと強調している。「真の亡命は片道切符なのです」とパレイはいう。一度、出国したが最後、生涯愛する故郷や家族や友人に会えないことを覚悟しなくてはならないからである。

だが、暗い話題ばかりではない。亡命ロシアの作家たちにとって、海外出版の土壌は近年整いつつある。

在外ロシア文芸誌の代表例としては、カナダ刊行の文芸誌『ノーヴィイ・スヴェート』である。この『ノーヴィイ・スヴェート』の興味深い点は、ロシア語で書かれてさえいれば、いかなる題材、いかなる国籍も民族も問わないというものだ。つまりこの傍聴記を読んでいるあなたにも門戸は開かれている。

ほかにも、ドイツの在外ロシア文芸誌『ベルリン・ベレガー』や、ベルギー刊行で、ディアスポラのロシア語詩をメインに扱う『エミグランツカヤ・リラ』がある。また、電子版の書籍であれば、国内外を問わず読むことができる。

近年、社会全体で分断や排除の動きが起き、悲劇の連鎖は続いている。だがそれゆえに在外文芸誌の刊行をはじめ、分断されたもの同士をつなげようとする試みが世界各国でなされている。そうした試みは、亡命作家たちの状況にひとつの希望をもたらしてくれるものである。

(2025年度大学院修士課程修了生)

## 年末年始ロシア旅行記

岡田 陽奈

まさか私が、ロシアで年越しをすることになるなんて。去る年末年始、およそ2週間に渡り、ロシアの3都市(イルクーツク、モスクワ、サンクト・ペテルブルク)を巡る旅に出た。露文コースの同期と共に敢行したこの旅は卒業旅行も兼ねており、道中では夢だった3泊4

日のシベリア鉄道への乗車も果たした。ここでは、予想外の出来事と出会いに満ちた旅路を振り返る。

北京での飛行機の乗り継ぎを経て、はじめに降り立った地はイルクーツク。いよいよロシアに到着したと感動に包まれたのも束の間、入国後 24 時間のインターネット制限という壁に早くも突き当たることとなった。おまけに、現地の気温はマイナス 20 度。スマートフォンの電池が驚くほどの速さで減ってだけでなく、電源そのものが勝手に落ちてしまう。人間だけでなく、スマートフォンまで早速ロシアの寒波の洗礼を受けることとなった。行先にイルクーツクを選んだのはバイカル湖が目的だったが、インターネットが使えないと移動手段も調べられないので、とにかく道ゆく人に助けを求めるしかない。ひとまず市内中心部に向かい、バイカル湖行きのマルシュルートカ(ロシア版のミニバスのような乗り物)はどこから乗るのかと聞いて回った。すると市場のおじさんが乗り場を教えてくれ、無事乗車することができた。タクシーに頼らずに現地の人々と同じ移動手段を使おうと粘ったので、本来なら 1 人 2000 円する交通費を 600 円にまで削減することに成功した。原始的な方法ではあるが、人に尋ねるのがいちばん早く確実であると感じた。

湖に到着したところで、同じ車に乗り合わせた方が「今から展望台に行くけれど、良かったら一緒にタクシーに乗らない？」と誘ってくださったので、これも一期一会と思い、二つ返事で付いて行ってみることにした。しばし車に揺られ、到着してタクシーを降りてみると、なんとそこに広がっていたのはスキー場。なんでもリフトを登った先に大本命の景色があるとのことでさらに登っていくと、バイカル湖を一望できる絶景が待っていた。まさかロシアでスキー場に来るとは思ってもみなかったが、そこで見た最高の景色は、確実に彼らのおかげ。あの時、あのタイミングで同じ車に乗ったからこそ見られた景色に縁の重なり合いを感じた。

そして今回の目玉は、なんといってもシベリア鉄道。大学一年生の頃に授業で『世界の車窓から』シベリア鉄道編を見て以来、鉄道旅はずっと憧れだった。映像で見たように、乗り合わせた人々と会話をしてみたいと思う気持ちが私のロシア語学習の原動力の一つにもなっていた。そして想像通り、列車内でのいちばんの楽しみは交流だった。今回選んだ開放寝台式の三等車には、世代も出身地もさまざまな人が入れ替わり乗車してくる。お喋り好きのおばさまワレンチーナに、家族思いのセリョージャ、ブリヌイ(ロシアのクレープ)をプレゼントしてくれたアレクセイ、ソ連時代の思い出話をしてくれた老夫婦など、「ここでしか会えない人たち」から「今しか聞けない話」を数多く聞くことができた。列車に揺られ、どこまでも続くロシアの大地の広大さを車窓から眺めつつ、熱々の紅茶をすすりながら話をした時間は何物にも代え難い。まさに映画のような光景を前に、そこに自分が居られるということ、出会った人たちに関わっていけることの喜びを噛み締めた時間だった。

列車旅を終えてモスクワに到着すると、イルクーツクとは打って変わって大都会の整然とした空気感に圧倒された。特にランドマークである赤の広場をいざ目にした時は、それまでテレビで見ていた景色の本物が目の前に広がっていることに感動を覚えた。滞在中はモスクワで勤務されている露文コースの先輩のお宅にお世話になり、年越しの瞬間はテレビ

中継を見ながらシャンパンで乾杯をするというロシア式の方法でお祝いをした。翌日の元旦も早速赤の広場へ繰り出し、レーニン廟に赴いて初詣ならぬ、お墓参りをして一年の幸運を願った。正教会のロシアでは、欧米圏と異なりクリスマスを1月7日に祝うため、お正月を過ぎてても街の至る所にクリスマスツリーやその飾り付けが残っている。日本ではなかなか見ることのない光景が珍しく、ロシアならではの風習であると感じた。

モスクワ滞在を終え、さらに列車を乗り継いで最後の目的地サンクト・ペテルブルクに到着した。街に出て最初に抱いた感想は、「パリみたい」というものだった。街の中心を流れるネヴァ川を境に美術館や建築物が並ぶ様子には、まさにセーヌ川とパリの地を彷彿とさせるものがあった。

ペテルブルクでは、マリインスキー劇場でバレエ鑑賞をしたり、世界中の珍品を集めたクンストカメラという博物館に行ったりして観光を楽しんだ。さらに、露文コースの先生にご紹介していただいた卒業生の方ともお会いし、ペテルブルクでの生活の様子やお仕事の話などを伺った。卒業生のおふたりは、それぞれ現地の大学でロシア人学生を相手に日本語を教えている方と、ロシアで初となる酒蔵造りに励んでいる方だったが、おふたりとも大学卒業後に辿った道がとてもユニークで面白く、お話を伺っていて多くのことを学んだ。さらに、渡航の少し前に知り合ったペテルブルク在住の日本美術研究者の方ともお会いし、街の穴場を案内していただく機会に恵まれた。そして、今回の旅と同じ時期に半年間のペテルブルク留学のため現地に滞在していた同期にも会うことができた。大学で4年間一緒にロシア語を勉強してきたその同期とは、卒業旅行で一緒にロシアに行くことをと約束していたので、夢が現実となった喜びはひとしおだった。

2週間の滞在を経て、どこに行っても人との繋がりが全てであることを改めて感じた。特定の場所に行くことも楽しいが、加えて「あの人に会いに行く」という目的があると旅はいっそう彩りを増す。今回もさまざまなタイミングが折よく合い、たくさんの方にお世話になりながら大変充実した時間を過ごすことができた。ロシアでの出会いと、ここ露文コースから生まれたご縁と思い出を大切に、再びロシアへ冒険の旅に出る日を心待ちにしている。

(2025年度文学部露文コース卒業生)

## 2026年上半期会員の最新情報（2026年5月12日調べ）

五木寛之 著『大河の一滴』最終章 幻冬舎(2026/02)

五木寛之 著、ジャンヌ・モローほか 述『五木寛之傑作対談集』第3巻 平凡社(2026/04)

五木寛之、佐藤優 著『一寸先は闇』幻冬舎(2026/03)

鎌田慧 著『追い詰められた家族』皓星社(2026/01)

鎌田慧 著『成田闘争と国鉄民営化』皓星社(2026/03)

河村彩 著『エル・リシツキー：造形する力』水声社(2026/02)

木下豊房 著『リハチヨフの回想』群像社 (2025/12)

桑野隆 著『ピョートル・ボガトゥイリヨフ：民衆文化記号論へ向けて』水声社(2026/03)

マーシャ・ロリニカイト 著，清水陽子訳『親族の運命』新日本出版社 (2026/04)

時流研究会・早田秀人 編『われ以外みなわが師 ～ひととは皆考える葦』

株式会社プラウダ (2025/08)

東海林さだお 著『町中華の丸かじり』文藝春秋(2026/03)

田辺佐保子 編，安島里奈，杉野ゆり，田辺佐保子，塚崎今日子，藤井悦子 共訳

『ルサルカたち：水の精霊から生まれた物語』群像社(2026/02)

坂内徳明 著『ウラジーミル・プロップ：フォークロアのカタチとルーツを求めて』

水声社(2026/04)

坂内徳明 著『浮かれ騒ぐロシア』成文社(2026/04)

三浦清美 訳・解説『厳選 中世ロシア奇譚集』松籟社 (2026/03)

アーノルド・ローベル 著，三木卓 訳『がまくんとかえるくんセット』

ラボ教育センター(2026/04)

矢沢英一著『チェーホフ 忘れえぬ人物たち、言葉たち：「生きたイメージ」を読む』

平凡社 (2026/04)

**\* 著書を上梓された会員の方は、ぜひ編集部までご一報ください \***

## 早大ロシア文学会維持会員制度についてお願い

早大ロシア文学会の「維持会員制度」は、すでに多くの方々からのあたたかいご支援を頂戴しております。おかげさまで、毎年『ロシア文化研究』を発行することができております。『ロシア文化研究』発行の他にも、ニューズレター「ヴェスチ」の発行・送付、春季・秋季公開講演会の諸費用等にも、皆様より寄せられた会費が充てられております。

この制度は、会員の方々から広く「維持会員」を募り、維持会員になって頂いた方には、その年度の『ロシア文化研究』を年度末の発行に際して1冊お送りするという制度です。学会誌・ニューズレターの発行、講演会の諸費用等は大学からの補助だけではまかないきれません。会員の皆様には、本学会が担い続けている、日本のロシア文化研究の中心的役割をご理解のうえ、一人でも多くの方々からご支援を賜りますよう、お願いを申し上げる次第です。維持会員になっていただけます方は、以下の要領にてご送金くだされば幸いです。

- (1) 年会費は1年につき2,000円となります。
- (2) 維持会員費納入には、同封の郵便振替用紙をご利用ください（口座番号 00160-7-87172 加入者名 早稲田大学ロシア文学会）。差出人欄には、住所と氏名だけでなく、郵便番号と電話番号も必ずお書きください。
- (3) 複数年のお振込みをいただいた方には、自動的にその年度以降発行分、『ロシア文化研究』を、発行され次第、順次お送りいたします。
- (4) 『ロシア文化研究』は、年度末に発行されます。従いまして、前年度の『ロシア文化研究』をご希望の方は、振替用紙の通信欄にその旨お書き添えください。

少しでも多くの皆様のご協力とご支援を重ねてお願い申し上げます。

### 学会だより

- 2026年3月に文学部ロシア語ロシア文学コースから9名が卒業しました（うち9月卒業者1名）。文学研究科ロシア語ロシア文化コース修士課程の修了者は3名でした。
- 2026年度の文学部ロシア語ロシア文学コースへの進級者は7名、学士入学者は1名でした。また文学研究科ロシア語ロシア文化コース修士課程への入学者は3名、博士後期課程への入学者は0名でした。
- 2026年度春季公開講演会・総会が7月4日（土）に催されます。詳しい日時・場所につきましては、次項（6頁）をご覧ください。

\* ヴェスチに情報掲載を希望される方は、編集部まで原稿をお寄せください \*

## 2026 年度春季公開講演会・総会のお知らせ

早稲田大学ロシア文学会では、2026 年 7 月 4 日（土）に 2026 年度春季公開講演会・総会を開催いたします。今回の講演会では、早稲田大学文学学術院講師（任期付）の三浦領哉氏に「ウラジーミル・オドーエフスキーと 19 世紀ロシア音楽」と題してご講演をいただきます。

なお、総会は講演会終了後に引き続き執り行います。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

### ●講演会

日時： 2026 年 7 月 4 日（土）15 時 00 分から（16 時 40 分終了予定）  
会場： 早稲田大学戸山キャンパス 36 号館 681 教室

「ウラジーミル・オドーエフスキーと 19 世紀ロシア音楽」

三浦 領哉 氏

（早稲田大学文学学術院講師（任期付））

\* 会員のみならず、一般、学生の皆様のご来場を歓迎いたします。

### ●総会

講演会終了後、引き続き、同じ 36 号館 681 教室にて開催します。

☆講演会・総会終了後、懇親会も予定していますので、奮ってご参加ください。